

四大文明

The Four Great Ancient Civilizations of the World / INDUS

[インダス]

近藤英夫

NHKスペシャル「四大文明」プロジェクト
[編著]

NHK出版

インダス文明以降の南アジア

上杉彰紀

関西大学大学院

■インダス文明の解体とインド・アーリヤ人の移住

インダス文明は前二〇〇〇年頃から前一七〇〇年頃にかけて、衰退あるいは解体していく。衰退の意味は都市が消滅する点にあり、解体の意味は求心的な都市が失われた結果、地域文化へと分かれていく点にある。都市の消滅は広範な地域統合の消滅を意味し、都市文明たるインダス文明の最大の特徴が失われたことを示している。一方、地域文化の成立は、地域統合が崩壊する一方で、各地で新たな文化の形成が活発化したことをあらわしている。

一方、インダス文明の衰退後、南アジアの動向に大きな影響を与えたと考えられてきたのが、インド・アーリヤ語族である。そもそもインド・アーリヤ語族とは、黒海からカスピ海を原郷としたインド・ヨーロッパ語族の一分派であるインド・イラン語族から、さらに分派して南アジアへと移入してきた言語集団である。北インドを中心としたサンスクリット文化や南アジア全域に影響を及ぼすヒンドゥー文化の根幹をなしており、インド文明の形成を考えるうえで欠かすことのできない存在である。

彼らはいつ南アジアに移住してきたのか。この問題に関しては、言語学・歴史学・考古学を含めた諸々の観点から検討されてきた。インド・アーリヤ語族が残したヴェーダ文献類の中で最古に位置づけられる『リグ・ヴェーダ』の編纂年代を前一二〇〇年頃において、それに先行する前一五〇〇年頃をインド・アーリヤ語族の移住時期にあてる見解が一般的で

あつたが、近年はそれをさかのぼる時期に南アジアに彼らが存在していた可能性を示唆する考古資料が得られている。さらには、インダス文明盛期の段階にすでにインダス川西側の山岳地帯に居住していたとする考えすらある。

基本的に、インド・アーリア語族は一度に大挙して南アジアに入ってきたのではなく、波のように繰り返し移住してきたと考えられている。したがって、いつの段階に彼らの言葉が言語的に南アジアにおいて優位に立つようになったのか、明らかにすることは難しい問題である。また、インダス文明以降の諸々の考古学的文化を、インド・アーリア語族のそれに比定することも容易ではない。

■ポスト・ハラッパー期の諸文化

インダス文明解体以後の北インドでは、諸々の異なる系譜にある文化が生まれた。パンジャブ東部では、インダス文明の文化要素の一部を引く後期ハラッパー文化（ルーパル・バラ文化）と日暮地文化が混在的に広がり、一方ガンジス・ヤムナー両河には生まれたドアーブ地方では埋蔵銅器文化が、後期ハラッパー文化の要素の一部に取り込みながら成立した。概して、これらの文化は部分的にせよインダス文明の要素を継承しており、インダス文明解体後にインダス川流域から人々が移住したことによるものと考える見解もある。

この中で埋蔵銅器文化には、有棘鋸やY字形の柄頭を持つ剣、人形の器物など、インダス文明にはみられなかった特徴的な形をした銅器があるが、さらに興味深いのはこれらの銅器を大量に埋納するという行為である。銅器の大量埋納は社会集団の儀礼にともなうものと考えられており、インダス文明とは明らかに異なる文化伝統が存在したことが明らかである。これらの埋蔵銅器は赭色土器と呼ばれる土器にともなうことが近年の発掘調査によって確かめられており、赭色土器文化と呼ぶ場合もある。

これらの文化は前一五〇〇―前二三〇〇年頃までには衰退しており、考古学の資料でみるかぎり直接的にその後の北インドの文化発展に影響を及ぼすことはなかった。

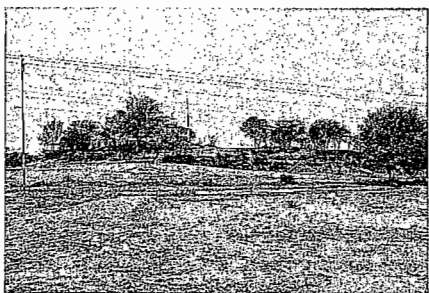
一方、北インドの東方地域では異なる文化の動向がみられた。北インドの東半部では、インダス文明盛期の段階から文明が波及しなかった地域であり、厚く森林に覆われた未開発地域であった。前二〇〇〇年頃までにはガンジス川中流域を中心として、細石器と赤色・黒色土器を特徴とする新石器文化が成立していたが、それは狭域にとどまるものであり、小規模な集落で自給自足的な生活を営んでいたと考えられる。このガンジス川中流域の新石器文化ではすでに稲の栽培が開始されていた可能性が高いことは、生業の点から続く時期の文化展開を考えるうえで重要である。

前一五〇〇年頃には、新石器文化を基盤として、銅器と石器を併用する金石併用文化が形成された。この時期にはガンジス川中流域を中心として比較的広い範囲に集落が分布するようになり、人口が増加しつつあった状況を示している。一部は埋蔵銅器文化が衰退して空白地帯となったドアーブ地方にも及んでおり、広範な地域に人々が移住を繰り返して拡散していった様子を物語っている。この金石併用文化は黒縁赤色土器という特徴的な土器を有しており、便宜的に黒縁赤色土器文化と呼んでいる。

黒縁赤色土器文化が北インドに広範に広がりつつあったのとときを同じくして、パンジャブ東部では彩文灰色土器と呼ばれる特徴的な土器が登場する。一部では後期ハラッパー文化と近接した地域に併存して集落を営んでいたようだが、後期ハラッパー文化が日干しレンガや焼成レンガを用いて住居を築いていたのに対し、彩文灰色土器文化の集落では凹形プランの木造建物を採用しており、文化系譜は明らかに異なっている。この彩文灰色土器文化はその分布地域と時代ゆえにインド・アーリア語族の文化としてみなす見解が強く主張されてきたが、どのようなプロセスを経て登場したのか明らかにならず、短絡的にインド・アーリア語族と同一視することはできない。



インダス文明の文化要素を引くルーパラ遺跡



同じくノバラ遺跡



ガンダーラ墓葬文化が栄えたスワート渓谷

注目すべきは、東から伸張してきた黒縁赤色土器文化と彩文灰色土器文化の間に接触があり、互いに影響を及ぼしあっている点である。前一〇〇〇年頃には彩文灰色土器文化の分布地域がドアーブ地方にまで広がり、土器をはじめ諸々の考古遺物に両者の相互影響がみられるようになる。加えて、技術面での画期として、前一〇〇〇年頃における鉄器の導入がある。彩文灰色土器文化・黒縁赤色土器双方においてこの時期に鉄器が導入され、武器や農工具が製作されるようになり、併行して石器は消滅する。ここに北インドは鉄器時代に移行する。鉄器、とりわけ鉄製農工具の導入は北インドの森林地帯の開発および農地の拡大に大きな役割を果たしたことが想定されているが、考古資料として残される鉄器は数量的に少なく、鉄器化の進捗度や鉄器が果たした役割については今後の調査の進展にまたざるをえない。

前一〇〇〇年頃から北インド各地で遺跡数が増加しており、新たな集落地の開発が進んでいた状況をうかがうことがで

きる。また、集落規模にも差異がみられるようになり、中心的な拠点集落が形成されていたことが予測できる。この時期には王権が強化され国家の前段階たる首長制社会が形成されていたことが文献史料に知られるが、集落規模の階層化は政治的・経済的な機能を集中させた中心的集落の形成を示すものであり、首長制社会を経て国家形成へと向かう社会の一端を垣間みせるものである。

前六〇〇年頃には北インド東半部で北方黒色磨研土器文化が成立する。この文化を特徴づける北方黒色磨研土器はさわめて丁寧につくられた土器で、器表面が黒色で、金屬のような光沢を持っている。北インド西半部の彩文灰色土器文化とともに鉄器がより普及し、集落規模も格段に増大している。この時期には北インド各地で都市が形成されていた可能性が高い。

ここで、彩文灰色土器文化、黒縁赤色土器文化、北方黒色磨研土器文化などと、それぞれ特徴的な土器「文化」の名を与えて呼んできたが、その内実は、土器にこそ地域的な差異が認められるものの、その他の物質的側面においては、北インドは一つの共通性を持っている。すなわち、土器を除いて北インドは前一〇〇〇年頃から文化統合の動きのもとにあったのである。それはすなわち都市・国家形成へと向かう北インド社会の変容の過程であった。

一方、北西インドでは、前一五〇〇年頃から前三世紀頃にかけて土壇墓あるいは石室墓を中心とした埋葬形式を特徴とするガンダーラ墓葬文化が栄えた。スワートの山岳地帯から南のガンダーラ平野、東のタキシラー地域にまで及んでいる。かつては北西インドの都市化はアケメネス朝ペルシャによる支配にその要因を求められていたが、長期間にわたってこの地域に独自の文化が展開したことが明らかで、従来の見解に再考が迫られている。北西インドにはチャールサダとタキシラーという二大都市遺跡があるが、このいずれの遺跡においても最下層でガンダーラ墓葬文化の存在が確認されていることは注目に値する。この文化が北インドの諸文化とどのように関わっていたのかという問題については今後の調査・研究

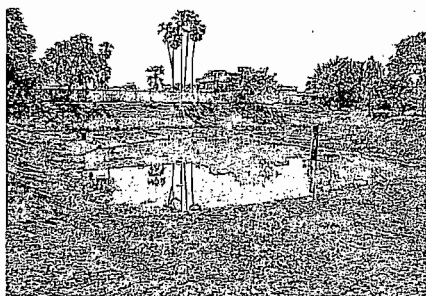
にまたなければならぬが、この文化が北西インドの都市化に大きく関わっていた可能性は十分にある。

■ガンジス川流域の都市化

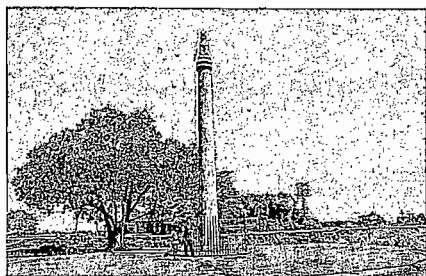
仏典を中心とした文献史料によると、釈迦^{シヤカ}が活躍した前六、五世紀には北インド各地に都市が存在し、北西インドから北インド、中央インドにかけて一六の国家が存在したという。それぞれの国家には都があり、この時期までには各地に都市が成立していたことがうかがえる。実際、考古学の発掘調査においても、この時期までには広範な面積を占める遺跡が出現しており、都市の出現を考古学においてもこの時期におくことができそうである。都市遺跡の発掘調査は、まだ十分に行われておらず、街路の配置や都市の区画、王宮などの都市の中心施設は確認されていないが、前三世紀頃までには、



マガタ国の首都があったラージギル



マウリヤ朝の都カンプカれたパータリプトラ



ラウリヤ・ナンダンガルのアショカ王柱。マウリヤ朝のアショカ王は各地にこうした柱を建てた

北インドの都市遺跡は一五〇—二〇〇ヘクタールを囲む城壁を持つようになる。都市の形成には少なからず王権を代表とする権力が関わっていると考えられる。

前五世紀もしくは前四世紀頃になると、銀貨と銅貨を中心とした貨幣も導入されるようになり、文字（西北インドではカロシユテイー文字、北インドではブラーフミー文字）も使われるようになる。

前四世紀末には、北インドを広く統一したマウリヤ朝が成立し、前三世紀中頃にかけてさらに領土を広げて南インドの一部を除いてインド亜大陸全域を支配するようになる。マウリヤ朝はパターリプトラに都を置き、その支配下に置かれた南アジア各地に記念柱や磨崖碑文を設置した。統一王朝による支配は安全な交易網の発達を促し、経済の発達とともに商人たちが活躍するようになる。インド亜大陸でいち早く都市化・国家形成を達成した北インドの文化はインド亜大陸各地に影響を及ぼすようになり、在地の文化と融合して各地の都市化を促すことになった。ここにインド亜大陸は一つの文明圏として確立することになるのである。

それでは、北インドにおいて早くに都市化・国家形成をもたらした要因は何であつたのだろうか。それにはさまざまな要因が絡み合っているが、一つには前一五〇〇年頃以降、インド・アーリヤ語族も含めて、人々の移住が活発化してそれまで未開発であつた地域を開墾、居住地化していったことが大きな要因となっている。人々が頻繁に移住を繰り返すことによつて、異なる地域の文化要素が接触し互いに影響を及ぼすようになる。一つの文化へと収斂・統合をめざすようになる。また、社会・政治あるいは経済といったさまざまな分野で統合が進むと、社会は複雑化し、秩序化へと向かう。それが都市化であり、国家形成の本質をなすものであると考えられる。

北インドは当時森林によつて覆われていたが、鉄器の導入が進むことによつて開発が容易になった。一方で、河川が著しく発達し、山地などの地理的障壁がない北インドでは、人の移動が比較的容易であるという利点もある。開発地では小

麦と稲を主体とした二期作が行われることによって、食料生産も増大したことであろう。こうした要因が複雑に絡み合っ
て北インド社会は統合へと歩を進めることになったのである。

インド・アーリア語族がもたらしたヴェーダを聖典とするバラモン教は、長期間にわたって北インド土着の宗教観念と
融合することにより、より広い範囲に普及していくことになる。ヤクシヤ・ヤクシーといった自然崇拜から発生した神格
はまさに北インド土着の宗教観念に由来するものであるが、それは仏教・ジャイナ教あるいはバラモン教（後世にヒンド
ウー教として発達）に取り込まれている。そこには宗教の厳密な狭義の差異を超えたインド固有の宗教観念ともいえるべき
ものが通底しており、インド世界の重要な構成要素として存在している。

こうした社会・文化的な統合のプロセスは、インダス文明の解体後に生じたものであり、前一〇〇〇年代の北インドの
都市化の時期を通じて徐々に進行したものであった。



自然信仰に由来するヤクシー
【インド博物館】